

P1-072

ダウン症候群を中心とした障害者(児)のライフサイクルに応じた課題の理解を目指した学生フィールドワークの成果報告

西井 崇之¹、栗原 麗羅¹、畑下 博世¹、
入駒 一美¹、近藤 純子¹、桑原 義登²、
江田 裕介³、小田 真弓²

¹東京医療保健大学和歌山看護学部 看護科、

²和歌山信愛大学教育学部、

³和歌山大学教育学部

【目的】

障害者(児)および家族の発達課題・生活課題を抽出するフィールドワークが障害者(児)および家族への支援に関する学生の理解と学習の動機付けにもたらした変化を明らかにする。

【方法】

A 大学看護学部、B 大学教育学部、C 大学教育学部に在籍している学生 7 名を対象に、フィールドワーク参加前後に障害の理解と日本語版 MSLQ 尺度等に関する無記名自記式質問紙調査(自由記述を含む)を行った。なお、本研究は、所属機関の倫理審査委員会の承諾を得た上で実施した。

【結果・考察】

障害者(児)支援に関する理解度に関する参加前後の調査結果を比較すると、9 項目中 8 項目が高くなっていった。また、自由記述の内容からも同様の傾向が窺えた。特に障害者(児)との良好な関係の築き方、障害者(児)の健康課題のニーズの抽出、障害者(児)の自己決定およびエンパワメントを促進する支援、QOL を向上するための支援の理解の 4 項目の理解度が上昇していた。日本語版 MSLQ 尺度の全 31 項目の平均値(1~7 点)は、全体で 3.8 点から 4.8 点に上昇していた。MSLQ 尺度の得点は学習の動機やスキルのレベルを示す。下位指標 6 項目中 4 項目(学習評価: 2.9 点から 5.7 点、テスト不安: 3.5 点から 4.9 点、学習能力やスキル保有: 4.1 点~4.7 点、内的目標志向: 3.1 点~5.0 点)で上昇し、2 項目(自己効力感: 5.0 点~3.7 点、外的目標志向: 4.3 点~4.3 点)で低下・変化なしであった。フィールドワークへの参加前後に行った調査から、フィールドワークに参加した学生が、障害者(児)及び家族の理解や様々な専門職者の支援がライフサイクルに沿って展開されている意義を理解できたことが明らかになった。また、大学や年齢の壁を越えて同じ地域で学ぶ学生や地域で生活している人々の交流を深めることで、地域でのつながりが生まれたと考えられる。今回の調査結果は、学生が自身の専攻分野にとどまらず、看護、福祉、教育といった様々な関連分野を横断する形で障害児(者)支援について学んでいくことの必要性や、学外に出向き当事者から学ぶフィールドワークの重要性を示唆するものであった。

なお、本発表の内容は、令和 2 年度大学等地域貢献促進事業の助成を受けて実施した研究成果であり、『東京医療保健大学紀要』第 16 巻(2022 年 4 月発刊予定)に掲載された論文に加筆修正を加えたものである。

P1-073

ダウン症候群を中心とした障害がある人(児)および家族と学生のインタラクティブな場を通じたライフサイクルに沿った各年代の課題の抽出および協働の在り方の検討

岡本 竜太郎¹、益田 拓実¹、澤田 楓香²、
上久保 梨沙²、西井 崇之³、桑原 義登²、
江田 裕介¹

¹和歌山大学教育学部、

²和歌山信愛大学教育学部、

³東京医療保健大学和歌山看護学部

【目的】

ダウン症候群を中心とした障害がある(知的障害・自閉症スペクトラム障害等)人(児)および家族のライフサイクルに沿った健康寿命の延伸、QOL の向上を目指した学生と当事者のインタラクティブな場を通じた各年代の生活・発達課題の抽出及び協働の在り方を検討することを目的とした。

【研究方法】

研究の実施期間は、2020 年 10 月~2021 年 3 月であった。研究方法は、交流企画の実施前にダウン症候群を中心とした障害がある(知的障害・自閉症スペクトラム障害等)人(児)の家族及び普段関わっている専門職に同意を得て行った。なお、本研究は、所属機関の研究倫理審査を経て承諾の上で実施した。

研究対象者は、各交流企画毎に A 県内のダウン症候群を中心とした障害がある(知的障害・自閉症スペクトラム障害等)人(児)とその家族 15 名程度、企画全体では専門職(医師・理学療法士・保育士・特別支援学校教諭・精神保健福祉士・相談支援員等)15 名程度とし、研究協力を得て学生企画に参加してもらった。交流企画は、乳児期・幼児期・学童期・成人期の発達課題に応じた童歌などの親子遊びや絵本の読み聞かせ、ごっこ遊びやダンス、ポッチャ等を計画した。

調査は、各交流企画終了後にインタビュー調査と無記名自記式質問紙で行い、学生との交流を通じての満足度、今後の子育て(関わり)に活かすことができること、感想・意見・大学に期待すること等とした。

【結果・考察】

交流企画実施前には、小児科医師より出生前診断などについての講義を受け、両親の心境を理解するための多角的な視点や様々な専門職との連携の重要性を学んだ。乳幼児期のダウン症候群がある乳幼児と保護者におけるアットホームなつながりを作るための会に参加し、医師や理学療法士による早期療育、会員同士による相互理解と情報交換を行う場としての役割を学び、親子遊びなどを実施した。幼児期は、児童発達支援センターで実施されている療育の様子を見学し、絵本の読み聞かせを実施した。学童期は、放課後等デイサービスと特別支援学校の様子を見学し、ごっこ遊びやダンスを実施した。成人期では、生活介護・就労継続支援 B 型事業所を見学し、ポッチャやショートムービーの鑑賞会を実施した。

なお、本発表の内容は、令和 2 年度大学等地域貢献促進事業の助成を受けて実施した研究成果の一部です。